

ダウン症児への早期個別支援に関する実践的研究

～応用行動分析の手法を生かして～

石原 忍 白ゆり保育園

● 研究の目的 ●

ダウン症児に対する早期支援の有効性については、これまで様々な研究によって紹介されている。¹⁾ 近年、特別支援教育の推進に伴い、広汎性発達障害児・者などを対象として、応用行動分析の手法を生かした指導・支援の事例が広く報告されるようになった。しかし、就学前のダウン症児に対する早期個別支援の有効性を示した実践例が十分報告されているとは言えない。本研究においては、ダウン症児の早期の個別支援において、応用行動分析の手法を生かした定期的な学習支援を実施し、その有効性を明らかにしていくことを目的とする。

● 研究の経過 ●

1 理論的な枠組み

山本ら²⁾は、「応用行動分析の手法を生かした教育技法の基本は、先行刺激（Antecedent Stimulus）、行動（Behavior）、後続刺激（Consequents Stimulus）の3つの関係を安定させること」と示している。

本研究においては、子どもの望ましい学習活動を展開していくために、①～③のような支援を実施する。

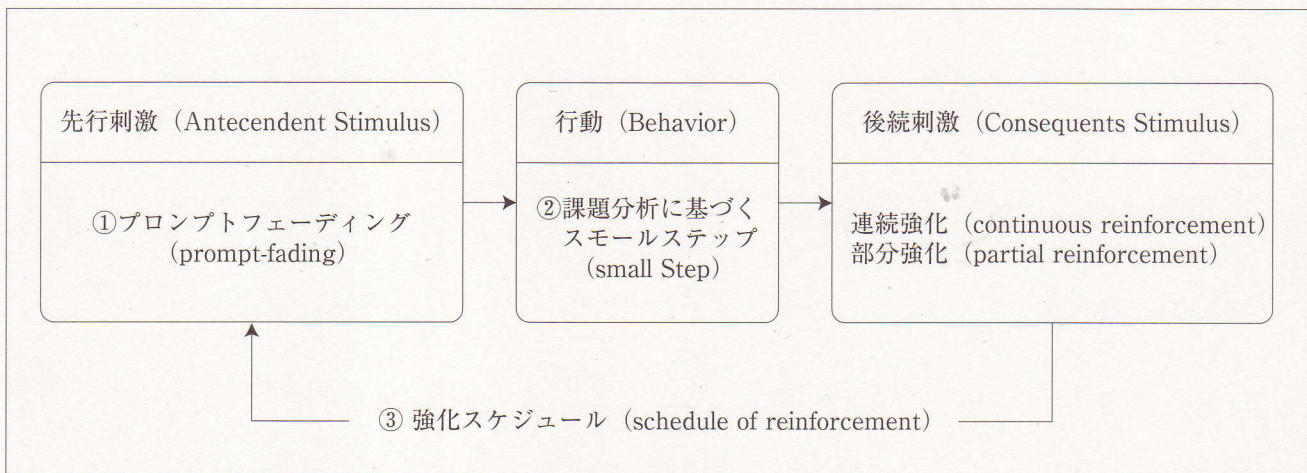


図1 本研究において中心となる支援

①初期には強めの支援を施して期待する学習行動を出現させた後、その行動を維持させるように支援を実施し、最終的には支援がなくても自発的に行動できるよう支援する。②学習に対する達成感と意欲を高めるために、課題分析に基づき、達成可能な小さな学習ステップを構成する。③子どもの特性や学習の流れを考慮して、適切な強化スケジュールを実施する。

2 方法

(1) 研究の手法

定期的な個別支援に基づく実践研究 週1回45分程度の定期指導を実施する。（隔週・月1回も含む）

(2) 対象児とその家庭

2歳～5歳のダウン症児17名（うち9名が岡山県在住 8名が県外在住）

(3) 実践の枠組み

写真1のように、個別支援室において支援者と子どもとのマンツーマンレッスンを実施する。写真1の子ども（4歳）への学習支援のプログラム例（H21. 3. 21）は、表1の通りである。



写真1 4歳児への数量指導の場面

表1 学習支援プログラムの例

- 1 ひらがな46pパズル（文字認知・形認知）
- 2 お買い物ゲーム（物の名前・数量感覚）
- 3 おままごと（応答コミュニケーション）
- 4 各種パズル（図柄・平面・立体認知）
- 5 カード学習①（発語・構音）
- 6 カード学習②（ポインティング・理解言語）
- 7 カード学習③（数唱・順序数・量感覚）
- 8 カード学習④（文字はめ・まとまり読み）
- 9 パソコン学習（ひらがな・数量）
- 10 プリント（書字・数の継次的、同時的理解）
- 11 紙芝居（文脈理解）

(4) 個別指導の期間

平成21年4月～平成22年3月

(5) 資料の収集とその整理

実践の経過については、写真や画像を添え、定期的にWEB上で公開する。³⁾

（平成21年度に実践記録を公開した日は以下の通り 4/15 23 30 5/1 14 21 28 6/2 11 19 25 7/9 23 24 27 8/5 8 12 9/4 11 18 10/1 2 9 15 11/20 12/10 15 17 1/6 12 15 2/9 11 3/5 11 16 18 計31回）

質的研究法の手順に従い、実践記録の内容を整理し、ダウン症児への早期個別支援の有効性を明らかにする。

(6) 結果

本研究の対象となった17名のダウン症児は、知的水準も認知特性も多様である。また、それぞれの発達の経過も異なることから、その子の特性や意欲に応じた個別の課題の設定が重要である。個別支援の場面においては、ねらいを十分精査したうえで、フレキシブルな課題の提示、可能な限りの自己決定場面の尊重、既習事項を使えば自力解決できる小さなステップの構成などが効果的であった。多くの子の場合、課題達成への意欲が強いために、逆にそれが出来ないことを受け入れにくい。そのため、事前につまずきを予想し、周到な支援を実施しながら、その支援を段階的に除去する支援が有効であった。プリントやカードなどによる抽象的なものではなく、具体物を使い、ロールプレイなどよりリアルな場の構成をすると生き生きと学習する子が多い。達成できた課題への適切な強化は、次の課題への達成動機につながった。

● 成果 ●

何人かの保護者から、「見違えるように生き生きと活動する我が子の姿に驚いた」という感想が寄せられた。こうした家族の気持ち子どもにも伝わり、子どもはますますやる気をみなぎらせているようであった。それぞれのダウン症児の長所を活用した学習を行っていく上で、上記の①～③の支援が有効であったと考えられる。

● 今後の課題 ●

就学前においては、各種機関において個別療育などの機会を利用することが可能であるが、就学後は特別支援学校や特別支援学級などでの小集団学習が中心となり、個別支援の機会が少ない。集団での学びの場の重要性を踏まえたうえで、ダウン症児の発達の臨界という面から、就学後の個別支援の機会とその内容の充実が望まれる。

<参考文献およびWEBページ>

- 1) 安藤忠 (2007) 新版ダウン症児の育ち方・育て方 学習研究社
- 2) 山本淳一・池田聡子 (2005) 応用行動分析で特別支援教育が変わる 図書文化社
- 3) 「どの子も伸びるどの子も伸ばす」ダウン症児の学びと育ち<http://shinobu1.blog117.fc2.com/blog-category-18.html>